

巻頭言

この小冊子は、研究室のメンバー向けにまとめた、2011 年度の研究室の記録です。

今年度、稲垣堯、船曳彰の二名が、博士（理学）の学位を取得しました。おめでとうございます。私にとっても、前任地からの縁、市村先生との縁、フェロセン系イオン液体の発見、ミリング実験など、様々な思い出が浮かび、感慨深いです。門出を祝します。

この一年の出来事を振り返ります。4 月に、同じ講座に高橋一志准教授が着任されました。9 月には、メスバウアー分光の国際会議が行われました。もともと東京開催の予定が、東北の震災の余波で神戸開催になったものです。私も組織委員の一員として、研究室メンバー全員で、学会の運営にあたりました。Reiff 教授の神戸大来訪も愉快的な出来事でした。10 月には（株）リアルモチベーションの岡雅史先生をお招きし、人材育成セミナーを開きました。2 月、東工大名誉教授の市村國宏先生に来訪いただいたことも感謝です。

この間、研究は大幅に進展しました。新聞掲載も数件ありました。イオン液体の研究がマンガの形で新聞掲載されたのも面白い出来事です。これらの資料も本誌巻末にあります。

この 3 月の化学会（横浜）では、参加者 6 名はみな素晴らしい研究発表をしました。次回からは自分たちのセッションを作りましょう。学会にあわせて、鈴木信也君をはじめとする卒業生の皆さんと、在学生を交えた懇親会が持てたのも楽しい出来事でした。卒後 10 年以上たっても、研究室での実験や出来事を良く覚えているのには驚きます。身が引き締まる思いでもありました。卒業生に幸あれと祈ります。

ところで、大学教員は長期的視野で人材育成を心がけますが、そのような方針と工夫は、現役学生には必ずしも理解されません。ところが最近、「研究室で学んだことが、社会に出てから如何に役立っているか」を、OB が語ってくれるのを初めて耳にしました。この話にどのくらい一般性があるかはわかりませんが、それでも個人的には大変嬉しいことです。卒業後、数十年経ってからも「この研究室で学んでよかった」と言われる研究室を作りたいと思います。この趣旨は研究室の Web ページにも載せてあり、偽らざる心境です。

私の方は、専攻長（学科長）としての、二年間の任務を終え、4 月からは、気持ちも新たに研究・教育に邁進します。

（2012 年 3 月 29 日 持田）